

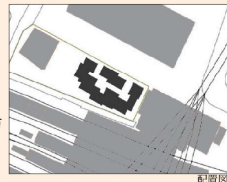


Breathe & Branch

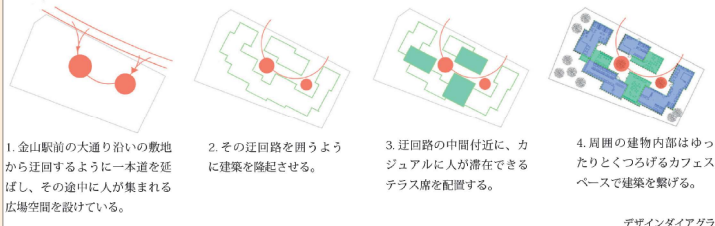
都市の中の森で過ごす寄り道空間

1. 日常的な往来に温かみを

本提案では、2028年に取壊しが予定されている「アスナル金山」跡地を計画地として設定した。この場所を選定した理由は、純木造建築が持つ特性と魅力を最大限活かせるためである。現在の金山駅周辺は、再開発が進むにつれて無機質な街並みへと変化しつつある。一方で、駅は通勤・通学など日常的な往来が非常に多く、多様な世代が行き交う都市空間である。こうした場所こそ、純木造の持つ「温かみ」や「やわらかさ」が際立ち、人々に強い印象を与えると考える。地方の観光施設としての木造建築ではなく、都市の中の日常に木を取り入れることで、より多くの人にその価値を感じてもらえる場を目指した。



配置図



デザインダイアグラム

2. 名古屋市の魅力の再発信と再認識

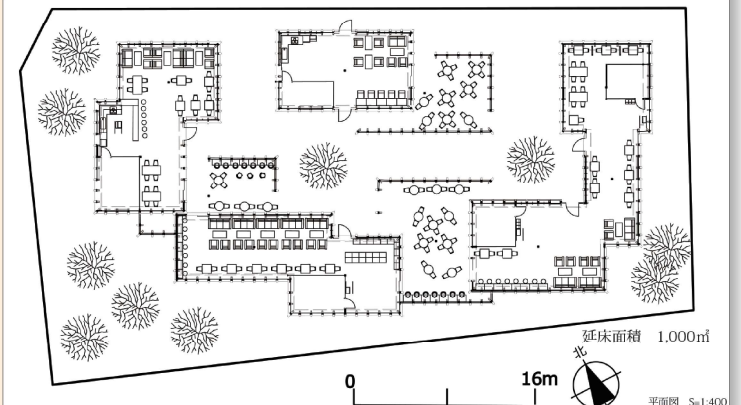
本計画では、純木造建築を活かした喫茶店としての利用を想定している。かつて名古屋市には、地域に根ざした個人経営の小さな喫茶店が数多く存在し、まちの文化や人々の生活に深く関わっていた。しかし近年では、全国展開のチェーン店の台頭により、そうした喫茶店は減少傾向にある。私たちは、喫茶店を単なる飲食の場ではなく、人と街をつなぐ文化的な装置と捉えている。とくに名古屋においては、「モーニング文化」に象徴されるように、喫茶店は日常の中に根付いた重要な存在である。そこで本提案では、地域に根ざした喫茶店の魅力を再発見・再発信することを通じて、まちの個性を再認識し、訪れる人々や暮らす人々がこの街をより深く「好きになる」きっかけをつくりたいと考えた。

3. 「通過点」から「寄り道」へ

金山駅のような主要駅は、多くの人にとって「通過点」としての性格が強く、駅前の施設に積極的に立ち寄る機会は限られている。とりわけ通勤・通学を目的とした利用者にとって、駅は目的地へ向かうための経路に過ぎないことが多い。私たちは、そうした日常の中にこそ「ふと立ち寄りたくなる」仕掛けが必要だと考え、小道状のアプローチ空間を計画した。この小道は、緑に包まれた空間の中を、純木造の柱梁がリズムカルに構成され、まるで森の中を歩くような体験を提供する。この自然と木の構造が織りなす空間は、都市の中で一瞬足を止めたいくなるような「余白」をつくり出す。単なる通過点に過ぎなかった駅前が、人々の心をほぐし、立ち寄る価値のある場所へと変化することを意図している。また、喫茶スペースでは、ゆとりのある落ち着いた内装計画とし、滞在時間が長くても快適に過ごせる空間を確保している。一方、建物の外部には開放感のあるテラス席を設け、待ち合わせや短時間の休憩などにも利用しやすい、カジュアルな滞在の場を提供する。このように、利用者のニーズに応じた多様な滞在スタイルを可能にすると同時に、駅前施設として求められる十分な座席数の確保にも配慮。回転率と快適性の両立を図り、都市の日常に自然と溶け込む喫茶空間を目指した。

4. 「地中に埋まった魅力の再発見」

本計画のデザインコンセプトは、「地中に埋まった魅力の再発見」である。名古屋に根付いていた小さな喫茶店の文化は、再開発による都市の変化とともに、まるで新たな都市レイヤーの下に埋もれてしまったかのように存在感を失っていった。しかし近年、リニア中央新幹線の整備をはじめとする地下空間の開発が進む中で、私たちはその「埋もれた価値」が再び浮かび上がる可能性を感じた。このイメージを建築のかたち落とし込むにあたり、地面から突き出すように姿を現す「四角錐」の造形を着想の起点とした。壁面はすべて内側に傾斜し、地中から芽吹いたような有機的な印象を与え、ともに、上部に向かって開く構成によって、自然光や周囲の風景への視界が広がるよう計画している。さらに、建物一部の壁面には芝を植える計画とし、敷地全体にも同様の芝を敷設することで、建築と地面との境界を曖昧にし、建物が地面の一部として立ち上がってきたかのような一体感を演出する。こうした構成によって、埋もれかけた地域の魅力を、新しい都市空間の中に再び立ち上げる象徴的な建築を目指した。



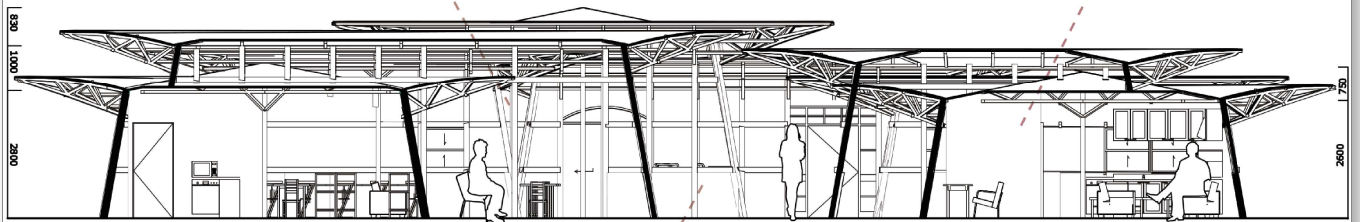
延床面積 1,000㎡

平面図 S=1:400

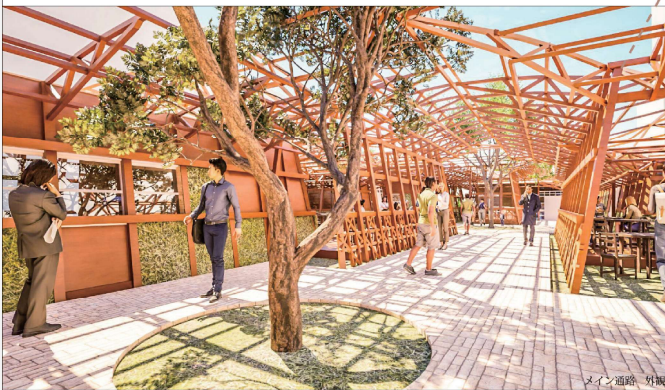


カフェ席内観

カフェスペース 内観



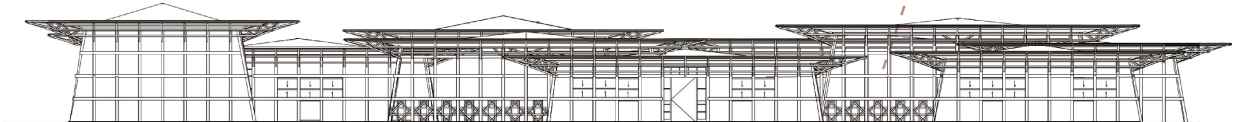
短手方向断面図 S=1:100



メイン通路 外観



通路入口 外観



北側立面図 S=1:200



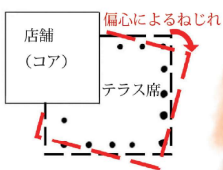
東側立面図 S=1:200

多様な利用スタイルに応える場の創出

本計画では、通勤・通学時に単に通るだけの場所ではなく、多様な滞在スタイルに対応できる場の創出を目指しました。例えば、短時間の待ち合わせや休憩時にはテラス席で気軽に過ごすことができ、またカフェスペースではゆったりとした時間を楽しむことが可能です。こうした多様な利用形態を実現するために、配置計画の細部に至るまで綿密に検討を重ね、利用者一人ひとりのニーズに応えられる空間構成としています。普段は何気なく通り過ぎるだけの駅であっても、「通り過ぎる」という行為自体に価値を見出し、その行為を積極的に誘導しながら、新たな交流や発展の契機となる場へと昇華させること。それこそが、駅前建築物に求められる重要な役割の一つであると考えています。

構造ダイアグラム：テラス席の格子壁

各店舗の間に配置したテラス席の屋根は、隣接する店舗のコア部分の耐震壁を主たる耐震要素とする計画とした。テラス席は各店舗を覆行して配置したため、耐震壁がある面と無い面が存在することになり、地震時に偏心によりねじれが生じる恐れがある。そこで耐震壁がない通路側についてはねじれを抑制する目的で壁を設けた。壁は、通路側からの視界の透明性を確保するため、格子壁を採用した。格子壁は、鉛直材および斜材、横材で構成し、各材の交差部の仕口のめり込み耐力で水平力に抵抗するさせる。



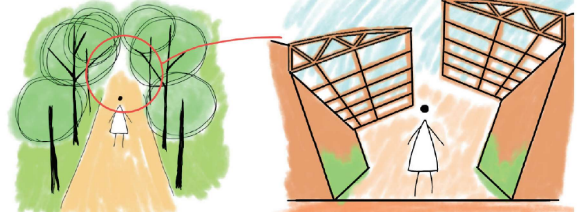
テラス席の屋根は隣接する店舗のコア部分の耐力壁を主たる耐震要素となっている。そのため、耐震壁がある面とない面が存在することとなり地震時に偏心によるねじれが生じる恐れがある。

その対策としてねじれを抑制する目的で壁を設けた。しかしその高さによっては通路側への視界を妨げる要素となり、当初想定していたテラス席のカジュアルな透明性が損なわれる恐れがあった。

そこで壁には格子壁を採用することとなった。格子壁は鉛直材及び斜材、横材で構成し、各材の交差部の仕口のめり込み耐力で水平力に抵抗するようにさせている。

構造ダイアグラム：屋根

各店舗間を抜ける小道状のアプローチを通行人が森の中を歩くように感じられるように、木々の葉が折り重なる様子高さレベルの異なる屋根で再現した。軒の出は2mで計画し、屋根が折り重なるようにした。2aの軒を実現するため屋根の小屋根は、機体から水平に長いスパンを伸ばす飛行機の主翼を参考にしトラス架構で計画した。木材は材ごとに強度にばらつきがあるため、一本の大径木を用いるのではなく、小さな部材(500~1300mm)を組み合わせたトラス架構にすることで材一本当たりの負担を軽減するとともに、そのような屋根組を1000mmスパンで配置し、屋根を支えることで構造の安定性を確保することを旨とした。



森の中を歩くように感じられるようにすることをデザインイメージとしている。そのため、双方向から枝が伸びてくるようなイメージの形とし、その屋根が折り重なるようにイメージした。

通り抜ける人のため、軒の出は2mを計画している。屋根のデザインによって片持ち梁となってしまったため、軒の出2mを実現するためにトラス架構での計画となった。1000mmスパンで屋根組を配置しつづけることで荷重を分散させ安定性を確保している。